見た夢、起こったこと

日頃寝　ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
見た夢、起こったこと

【Ｎコード】
Ｎ８２７２Ｑ

【作者名】
日頃寝　ハル

【あらすじ】
高校生の葵は友達の彩に強く意見できない。稲垣次郎は兄に見捨てられないよう学校に真面目に通うことにする。
二人が見た不思議な夢が二人を繋ぐ。

雪がしんしんと降っていた。
誰が雪が舞い降る音にしんしんなんて擬態語をつけたのだろう。
葵はそんなことを思いながら、廃れた商店街の車道の真ん中を歩いていた。
どれもこれも閉まったシャッター。
下品な落書き。
人の気配はない。
何故ならここは、何処でもない世界なのだから。
葵は自分の身体が小さいことに気がついた。
ツィードのピンクのスカートから伸びた足は棒のように真っ直ぐ伸びている。
履いている靴には見覚えがあった。
赤いバレーシューズ。
一度しか履いたことがない。
小学二年のとき、ピアノの発表会で履いた一度きり。
よく見れば、葵の姿は発表会に行ったときの姿だった。

ここはどこだろう。

夢を見ていた。
最近、同じ夢ばかり見る。
冬が逆戻りしたかのような、肌寒い朝だった。
葵(あおい)は髪をクシャクシャに掻いた。
目ヤニを腕で擦り落とし、骨の鳴る音が聞こえる程身体を捻り伸びをする。
「うううぅー」

もともとハスキーな声を持つ葵が唸ると、気味が悪いほど低く周囲に響いた。
それが自分では嫌で仕方が無いのだが、毎朝つい伸びのついでに唸ってしまう。
「朝よー」
階下で母が呼ぶ声が聞こえた。

「うーん。どうだったっけ」
「あれだよ。きっと、深層心理的なさぁ」
葵は友達の彩(あや)と今朝見た夢の話をしていた。
教室の前にある葵の机には、朝から彩が陣どって葵が来るまで待っている。
「葵さ、引っ越す前は苛められたりとか、してなかった?」
葵は高校に入学するときこの町に引っ越してきた。
彩とは一年の頃から二年間の付き合いだ。
三年の進級に伴うクラス替えで、クラスが離れる心配もあったが、三年間同じクラスになった。
「してない、してない」
彩の率直な物言いに笑いながら否定する。
中学校の友達とは今でも文通するほど、仲が良かった。
三年間、一度も会えていないが、卒業したら遊ぶ約束もしている。
「その夢、何回も見るんでしょ」
「うん」
「見たことない町なんでしょ」
「うん。そう」
「不思議だねぇー」
彩はポニーテールをブンブンと振り回すと、この話は終わり！　とでも言うように
「聞いた？　稲垣くんの話」

と違う話題を持ち出した。
「聞いてない。何？」
葵も話を変えられたのは、気にしてないように、彩に聞く。
「稲垣くん、学校辞めるんだって」
「うそ。三年になったばっかりなのに」
「ホントみたい。今朝早く、校長と一緒にいるのを舞子が見たって」
「へー」

稲垣次郎。
同じクラスの男子。
一年の時も同じクラスだった。
不良らしい。
葵は稲垣次郎に対してそんな知識しか持ってなかった。
たまに学校に来て、授業を受ける様子は何度か見た。
机の上に投げだされた足が前の席の子の制服にあたっても、誰も文句を言えない。
ワックスでカチコチに固められた髪がどんな色をしていようが、誰も文句を言えない。
授業の途中で帰っても、担任すらも何も言えない。
そんな生徒だった。

「いるじゃん」
葵は次の日、学校に登校していた稲垣一郎を見て、彩に囁いた。
彩は例の如く葵の席に座って、ケータイをいじり、葵が登校するのを待っていた。
「あれー。そうだね」
彩は関心が薄そうに答える。
稲垣は珍しく朝から、一番後ろの真ん中の自分の席に座っている。
葵は目を疑った。
「しかも髪……」

「黒いね」
彩が葵の言葉を続ける。
周りの生徒は遠巻きに見るだけで、稲垣に声を掛けられない。
何故なら稲垣は頬をや瞼を腫らし、シップだらけの顔に機嫌の悪さを滲み出していたからだ。
「何があったんだろう」
「さあー？」
教室の窓の外を見ると桜が舞っていた。
こんなに盛大に咲かれると、これが一ヵ月後には散って緑色になってしまうとは考えられない。
と葵は思った。
だけど毎年毎年、飽きもせずに桜は咲き、そして散る。
葵がこの高校に入学してきたときも、この桜は咲いていた。

稲垣次郎は夢を見た。
もちろん朝起きてから、今まで見ていた光景が夢だったのだと気がついたのだが。
夢の中で稲垣は真っ白いウサギを飼っていた。
そこは自分の家だが、ウサギと自分以外、人はいなかった。
稲垣はウサギにキャベツを与えた。
ウサギは細く切られたキャベツを前にして、「キャベツかよ……」と呟いた。
夢の中の稲垣は、突然喋ったウサギに驚かなかった。
「嫌いなのか」と思うと今度はリンゴを皮がついたまま切り、ウサギの前に置いた。
ウサギはリンゴには文句が無い様で、シャリシャリと齧った。
そんな夢。
何故そんな夢を見たのだろう。

しかし稲垣はウサギの声をどこかで聞いたような気がした。
女の声のような、だけど低く、響く声。
時計を見ると、もう学校に行く仕度をしないといけない時間だ。
考えるのは後にして、着替えよう。
稲垣は、今日から真面目に学校に行くことを決めたのだから。
自分とは違う、そんな世界の奴等のところへ。

稲垣が学校に通うようになって一週間。
葵はあの変な夢の続きを見るようになった。
今までは同じことの繰り返し。
小学生の自分がピアノの演奏会の服を着て、誰も居ない商店街を歩くだけの夢だった。
「稲垣くんねー」
葵は今朝も彩に夢の話をしていた。
夢の話とは不思議なもので、話題が発展するようなものではないのに、聞く方にとってはつまらない話なのに、ついついしてしまう。
「そう、商店街のシャッターの落書きをしてたの」
「一人で？」
「そう。稲垣くんが一人で。」
彩はふーんと言ったあと、急に真剣な表情になって葵に顔を寄せた。
「まさか、葵。稲垣くんが気になるとか、言わないよね？」
「はあ？　ないない」
葵がちらっと稲垣を見て顔を横に振る。
稲垣は机に突っ伏しているが、寝てはいないようで、葵の視線に気づいたのか顔を上げた。
「好きとか、言わないよね？」
「ないない。夢に出ただけ」
葵は顔を極端に近づける彩と目が合わないよう、窓の外を見た。
桜はほとんど散って、葉と混ざり合っている。

「なんだぁ。つまらない」
彩が大げさに溜め息をついた。

稲垣が校長と話したのは、出席日数についてだ。
これ以上休むと卒業できなくなる。
いや、このペースで、と言うべきか。
本当は進級だってぎりぎりだった。
しかし、これから真面目に学校に通うこと。
夏休み、冬休みに補習を受けることを条件に卒業させてもらえることになった。
そのことは学校の友人には言っていない。
稲垣のクラスメートは不思議そうに稲垣を見るばかりだった。
稲垣は学校に馴染めない。
元の自分の居場所が懐かしいような、だけどそこにはもう帰れない。
そんな気がしていた。

冬服が夏服に変わった。
雨の多い季節になった。
稲垣が毎日学校に通う様子に生徒は慣れてきた頃だった。
葵は彩とカラオケに行った帰り、稲垣と数人の不良がコンビニでたむろしているところを見た。
きっと稲垣も世間一般の人からみたら不良の一人だ。
だけど稲垣は一人だけ制服だったし、葵は稲垣を知っていたから、不良のお友達なのか、と思っただけだった。
葵は寄ろうとしていたコンビニには寄らず、そのまま素通りした。

葵は夢を見た。

夢の中の自分は現実の自分と同じ大きさで、夏服を着ていた。
いつもの夢と同じシャッター通りを歩くと、一人でラッカースプレーで落書きをしている稲垣を見つける。
声を掛けようとして、目が覚めた。

「もういいよ。その夢のハナシは」
彩に今朝見た夢の話をしていた時、途中で話を遮って、彩が言った。
葵は「そうだよね。オチないし、つまんないよね」と彩に謝った。

彩に声を掛ける前、引っ越してきたばかりで緊張していた葵は、入学式からずっと友達が出来なかった。
ほとんどの生徒が同じ中学校の友達とそのままグループになっていた。
朝、ぽつんと席に着いて一日が始まるのが苦痛だった。
声を掛けられても、最初のうちは緊張で上手く返せなかった。
夏前、ちょうど今と同じ、じめじめした季節。
彩が友達とケンカし、葵に声を掛けてくれる前まで、葵は一人だった。
だから、かもしれない。
彩は葵に対していつも傲慢だった。
中学校の友達と遊びに行く邪魔をされたこともある。
わざとその日に遊びに誘うのだ。
しかし葵は彩に強く言えなかった。
この学校に入って彩が話掛けてくれたから、自分は一人じゃなくなったのだから。
二人が出合って、二年も経った今、彩以外にも学校に友達がいる今でさえ、たまにこんなふうに葵は彩に遠慮してしまうのだ。

稲垣次郎はずっと自分が、暴走族に入り、そのままヤクザになるの

だと思っていた。
兄、稲垣一郎のように。
兄の強い勧めで高校には入ったが、卒業したら、兄の率いる族に入れてもらえるものだとばかり思っていた。
ろくでもない母は兄弟に何も言わない。
そもそも自分に何か言える立場ではなかったし、そんな立場でも自分に関心の無い母は何も言わないだろう。
そう、稲垣次郎は思っていた。
だから高校に入って仲間とつるんで毎日を過ごした。
教師なんて大体バカだし、警察だって見下していた。
自分のバイクは持ってなかったが、仲間と乗るバイクの風を浴びると、なんだって出来るような気がしていた。
高校三年になって、このままでは卒業が危ないと、家に電話があった。
その新しい担任からの電話を取ったのが、稲垣次郎の兄だった。
まさか、殴られるとは思わなかった。
兄は受話器を置くと、すぐさま部屋にいて音楽を聴いていた稲垣次郎を蹴り上げた。
「テメー、甘ったれんなよ」
次郎を散々殴った後、兄は言った。
「高校も出れねぇような奴が、生きていけるわけねぇだろ」
稲垣次郎は兄が高校中退していることを指摘した。
「俺が真面目に働いていると思うか」
兄は静かに言って、また次郎を蹴り飛ばした。

仲間にはからかわれた。
「なんだよ。やっぱり将来が不安か」
不安じゃなかった。今までは。
ただ、もう兄に見捨てられた今。稲垣は急に不安になった。
これまで兄い頼りっぱなしだった自分が情けなかった。

だから学校に行くことにした。
卒業さえ出来れば、兄に許してもらえる。

夏休みの補習は苦痛だった。
しかし毎朝、学校の用意をする稲垣次郎を兄は確認するように起きだす。
兄を騙して学校をサボる、そんな度胸はなかった。
憂さ晴らしに稲垣は、登校途中のコンビニのゴミ箱を蹴飛ばす。
気分は晴れない。
しかし補習に来てみて驚いた。
成績が悪く補習を義務付けられている生徒の多さに。
なんだ、こいつ等真面目に学校行っているくせに、バカじゃねーか。
稲垣は思った。
教室の窓から見える桜の木は、濃い緑の葉に覆われている。
幹に止まる蝉が煩く鳴き、これが夏だ！　と叫んでいるようだ。
意外に、ウザくない。

授業形式の補習の中で、葵は教科書を読むようにと教師に指された。
葵は苦手な古典だけ夏休みの補習を受けることになったのだ。
彩はいない。
少しだけホッとしている自分がいた。
葵が読んだのは源氏物語の冒頭だった。
葵はこの昼ドラのような物語が嫌いだ。
しかし古典の教師は源氏物語が好きなようで、学年問わず補習の題材に選んでいる。
だから葵が源氏物語の授業を受けるのは、毎年夏休みの補習で今年は三回目だ。

その低い声を聞いたとき、デジャブのような感覚を受けた。
稲垣は補習の四時間目、古典の授業を受け半分寝ていたが、その源氏物語の音読を聞きハッとした。
とくに読み方が分からなくなったような声、少し声が小さくなり、低くなったとき。
どこで聞いたんだっけ。と稲垣は思った。
「あ、ウサギだ」
声を漏らすと、隣に座っている女子生徒がこちらを窺う。
夢の中のウサギの声だ。
いつだったか、キャベツに文句を言ったウサギの声。
自分でもよく覚えていたな。と稲垣は関心した。
声の方を見ると、同じクラスの見覚えのある女子が。
名前は忘れてしまったが、一年も同じクラスだった。
何故。稲垣は不思議に思った。

葵は古典の補習が終わると図書室で勉強した。
家に帰っても良かったが、午後から暇だとバレると彩に遊びに誘われてしまうかもしれない。
遊びに誘われたら、きっと断れないだろう。
最近、また夢に変化があった。
シャッター通りはいつもの通り。
稲垣くんはいなくて、葵はまた一人ぼっちで歩いている。
葵はクルクルとシャーペンを回す練習をしながら夢について考えた。
きっとこれは悪い兆候だ。
彩を避けていることで、また一人にぼっちになる予兆かもしれない。
私の夢。ううーん、考えすぎてハゲそう。
葵は自分では気がつかない内に唸っていた。
「うわっ！　怖っ」
振り向くと、図書室の出入り口のドアに側に稲垣次郎が立っていた。

「もうさ、やめちゃえばいいんじゃね？」
稲垣が言う。
葵はほとんど話したことがない稲垣に、彩への不満を言っていた。
「友達はそんなに簡単にはやめられないよ」
二人は、二人以外誰も居ない図書館の自習室で話していた。
葵は机に古典の問題集を広げていたが、それはただ広がってるだけだった。
「女子ってメンドクサイのな」
椅子に腰掛けて、盛大に足を伸ばし机に足を投げている稲垣は椅子をギコギコと揺らしている。
「彩って、独裁的なんだよ。自分勝手でわがままで」
「知らねーけど、お前と離れたくないとか、そんなんじゃね？」
「そうかなー」
投げやりに言った稲垣の言葉に、葵は納得がいかないように首をかしげた。
「なんで、稲垣くんにこんなこと話してんの？」
「知らね。お前が勝手に話し始めたんじゃん」
葵はふと思った。
きっと夢で何度か見たから、親近感が勝手に沸いているんだ。
だけど稲垣くんは、自分となんにも接点がない。
どうして話を聞いてくれるのだろう。
「私ね、夢で何度か稲垣くんに会ったんだ」
「へぇ。どんな？」
「稲垣くんがラッカースプレーでシャッターに落書きしてんの」
「それで？」
「それだけ。私はただ稲垣くんを見かけるだけ」
「オチねー」
稲垣は確かに地元の寂れた商店街で仲間と一緒に、ラッカースプレ

ーで落書きしたことがあった。
その時はまだ中学生だった。
あの時も兄について行って、しかし途中で「帰れ」と言われて。
兄と兄の友人の背を恨めしげ見つめて、家に帰る途中、母が知らない男の車に乗り込むところを目撃してしまったのだった。
「うん」
稲垣は嘆くようにあーあと言って、両手を頭の後ろで組んだ。
そして意を決したように、斜めになった身体を椅子ごと起こした。
「俺も、お前を夢で見たことある」
「うそっ」
「オチねーぞ」
「うん。聞きたい」
葵は机に向けてた体を、心無しか稲垣の方へ向けた。
稲垣は勿体付けるように、ほんの少し間を置いた。
「お前がウサギで、キャベツに文句を言うんだ」
そして話した後で恥ずかしくなったように、顔を背けた。
「あ・私、キャベツ嫌い」
「マジ？」
「マジ」
もしかして……と稲垣は葵を見て言う。
「リンゴは好きか？」
「え？　えっと、普通」
「なんだそれ」
稲垣が困ったように言う顔を見て、葵は思わず噴出した。
「ありがと。話せてなんかすっきりした」
「あっそ」
「そう言えばなんで稲垣くんは図書室に来たの？」
勉強道具を持ってなさそうな、稲垣に葵が聞く。
「それは……」

「兄貴、今日、本借りられなかった」
家に帰って来た兄に稲垣次郎は言った。
「そうか」
「なんか、クラスの奴が自習してたから、ついでに待ってたんだけど、センセー今日は出張なんだと」
「そうか」
兄はさほど残念そうには見えなかったが、落胆しているんじゃないかと、次郎は心配した。
「明日はいるらしいから、明日借りてくるよ」
明日もアイツは自習をしているのだろうか。
そう言えば名前が分からないままだ。
「明日も学校に行くんだな」
兄が確認するように言った。
「当たり前だろ」
次郎の声は弾んでいた。
もうなんだって平気な気がする。
悪い言い方をすれば、兄貴だって学校だって、つるんでたダチだって、どうでも良い気がした。
学校に行っててもサボっててても、補習を受ける奴はいる。
真面目に学校に通っている奴等は、それほど俺らと違わなかった。
そんなに違わないのに、どうして今まで避けていたのだろう。
「なんか、知んねーけど。今日変なことあってさー」
アイツと普通に喋って、アイツは普通に話した。
次郎は自分の声の変化に、気がつかなかった。
次郎の兄は微笑んだ。

葵は家でピアノの発表会の写真を見ていた。

いつか見た夢と同じ姿。
会場の入り口で緊張した顔で親と並んでいる小さい自分。
このとき感じた孤独、それがこんなにも自分を臆病にしているのかもしれない。
一人だけのステージ。
明るい照明が鍵盤と自分の指先を照らす。
観客の姿は暗くて見えないが、その視線と存在ははっきりと感じた。
恐ろしい不安に耐え切れず、舞台の袖を振り返ると、母と父が寄り添って自分を見ていた。
今では分かる。
母と父の自分以上の緊張が。
しかしその時葵が感じたのは、上手くやらねばと言うプレッシャーだった。

何時しか、あの夢を見なくなった。
そのことに気がついたのは卒業する前、初雪が降る朝だった。
葵は重い瞼を開け、布団の中から窓の外を見た。
空は白く、重く、しかしそこから舞い降りる雪は軽やかにしんしんと降っていた。
しんしんと。
誰が降る雪にそんな擬態語をつけたのだろう。
葵は思った。
だけど、まあいいか。
雪は雪で、毎年飽きることなく空から降ってくるのだから。
四季っていいなぁ。
と思えたのは布団から出る瞬間までで、葵が起き上がり伸びをしようとした瞬間に、寒さと冬を恨んだ。
思わず唸ってしまう。
「朝よー。起きなさい」
階下で母が呼ぶ声が聞こえた。

今日はまだ卒業前だけど、進路が決まったから、中学の頃の友達と会う。
今日じゃないけど、いつか彩にも紹介できたらいいな。
葵はそう思って「よいしょ」と布団から起きた。

（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

稲垣次郎くんの母は、子供を5人作り、5人目に吾郎と名づけるつもりだった。

と言う設定も考えましたが、入れる場所が分からず。断念。

未練たらたらにこんな場所に書いてみました。

しかし、反則ですよね。

えっと、私がみたウサギを飼う夢から発想しました。

こんな長いお話になるとは思いませんでした。

最後まで読んでくださり、ありがとうの気持ちでいっぱいです。

感想、ご指摘、宜しければ、よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8272q/

見た夢、起こったこと

2011年10月8日01時09分発行